337 卵巣癌における後腹膜リンパ節転移と予後の検討

済生会富田林, 東大阪市立中央*, 兵庫県立西宮**, 町立浜岡総合*** 古川直人, 安達 進, 森村彰子, 斎藤謙介, 岡子齊宏*, 久永浩靖*, 福本由美子*, 堀 謙輔**, 井谷嘉男**, 伊藤公彦**, 田守陣哉**, 野田恒夫***

【目的】卵巣癌の予後因子としては、残存腫瘍径が最も重要とされているが、後腹膜リンパ節転移の有無による検討は十分には行なわれていない。そこで、後腹膜リンパ節転移の有無が予後因子となるか、retrospectiveに検討した。【方法】1988年1月～1995年3月までに、当施設において後腹膜リンパ節廓清術が行なわれた上皮性卵巣癌64例を対象とした。1)64例を腹腔内所見により期別分類し、各進行期におけるリンパ節転移率を検討した。2)組織型によるリンパ節転移率を比較した。3)リンパ節転移の有無が予後因子となりうるか、腹腔内所見による期別毎にKaplan-Meier法により比較した。【結果】全症例の平均観察期間は27カ月であり、腹腔内所見による進行期はpT1:31例, pT2:3例, pT3:30例であった。組織型はserous25例, mucinous12例, clear cell11例, endometrioid9例, その他7例であった。化学療法は、主にCAP療法が行われており、CDDPは腹腔内に投与されていた。後腹膜リンパ節転移陽性率は、腹腔内所見による進行期pT1:6%(2/31), pT2:33%(1/3), pT3:53%(16/30)であった。後腹膜リンパ節転移の有無による生存率を比較した結果、pT1, pT2では両群間に有意差は認められなかった。しかし、pT3ではリンパ節転移陰性群はリンパ節転移陽性群よりも生存率が有意に高かった。(Wilcoxon $P < 0.05$) 【結論】1)腹腔内所見による進行期pT3の卵巣癌において、後腹膜リンパ節転移は重要な予後因子である。2)pT1の症例であっても、傍大動脈節が陽性の症例があり、pT1においてもリンパ節廓清が必要であると考えられた。

338 卵巣癌の骨盤リンパ節・傍大動脈リンパ節転移に関する臨床病理学的検討

弘前大
工藤香里, 横山良仁, 丸山英俊, 佐藤重美, 齋藤良治

【目的】卵巣癌の骨盤リンパ節(PLN)・傍大動脈リンパ節(PAN)転移について臨床病理学的に解析した。【方法】1988年1月から1995年5月までに当科で取り扱った原発性上皮性卵巣癌のうち、初回手術(両側付属器摘出, 子宮全摘, 大網部分切除)でPLN廓清とPAN廓清またはPAN生検を施行した24例, SLOでPLN廓清とPAN廓清を施行した3例の計27例を対象とし、臨床進行期別・病理組織型別のPLNとPAN転移頻度を調べるとともにこれらリンパ節転移を起こす危険因子を検討した。さらに、これらリンパ節転移が予後に及ぼす影響を調べた。【成績】1)PLN転移は27例中4例(14.8%)に認められ、PAN転移は27例中5例(18.5%)に認められた。2)I期(13例)II期(2例)ではPLN転移・PAN転移を認めた例はなかった。III期では、PLN転移は8例中3例(37.5%), PAN転移は8例中4例(50.0%)に認め、IV期ではPLN転移とPAN転移をともに4例中1例(25.0%)に認めた。PLN, PANともI期とIII期間で転移頻度に有意差を認めた($p < 0.01$)。3)PLN転移陽性4例は全例PAN転移陽性であり、その他PAN転移のみ陽性が1例あった。4)病理組織型とPLN・PAN転移頻度間には全体としては有意な関連はなかった。5)腹膜播種の存在, 腹水細胞診陽性, 腫瘍の両側性がPLN転移・PAN転移に関し有意な危険因子であった。6)III・IV期例での3年生存率はリンパ節転移陰性群で100%, リンパ節転移陽性群で60%であり、後者で予後不良であった($P = 0.062$)。【結論】卵巣癌のIII期IV期においてPLN転移陽性例は全例PAN転移陽性であったことから、III期IV期例ではPANを含むリンパ節廓清が必須であり、PLN・PAN転移の有無の検索は症例の予後判定上重要なことが確認された。